

新選組と流山

新選組外伝

近藤勇がやって来た

第1話

本所にお住いの吉野宏さん一家は昭和二十年三月十日未明の大空襲で焼け出され、その夜から足立・綾瀬の母の実家・金子家に厄介になった。「今度は本所の新選組の御入来かい」「焼け出されたの新選組ですが、近藤勇ご同様よろしく」といった叔母と父との会話をなぜか憶えていた。

後年、古文書を読む会に入って勉強をつづけていた吉野さんは、少年の時に聞いた金子家での会話を思い出して、何かないかと倉を調べさせてもらった。一包の文書が見つかったのが昭和五十年一月のこと。

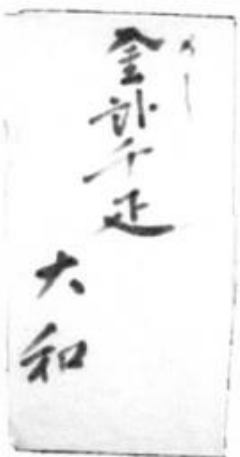
時は慶応四年三月十四日の夕方、金子家の親戚の泉谷次郎左衛門から使いが来て「知り合いの御屋敷の者が国元へ帰りたいが、道中が混雑しているから、ひとまず一兩日滞在したいので十五人程の宿を頼む」といつてきたので承知した。その夜十一時ごろ四十八人が到着。当主の健十郎は案内

人に対して「話が違ふ」と談判したが説諭され仕方なく応接。

翌十四日、大久保大和(実は近藤勇)が十人とともに到着。十五日、内藤隼人こと土方歳三が四人とともに来る。三月二十日には総計百二十九人にふくれ上がり、百四十坪の母屋に入り切らず、近くの観音寺と滝二郎宅に分宿する始末。甲州勝沼で板垣退助を長とする西軍に敗走して江戸に向い、三月十二日に負傷兵を会津に向けて先発させ、永倉新八らと袂を分つて五兵衛新田(綾瀬)の金子宅に身を寄せるというあわただしい日程。

四月一日の夕食どき「板橋の東山道軍が千住宿をめざして進行中」との密偵からの報告が近藤のもとにもたらされ、夜半、転陣を決意。お札に金二千疋(五両)と近藤の写真をおいて出発した。金子家の出費は三百四十二両であった。

(文/大出俊幸)



近藤勇直筆の「のし袋」=足立区綾瀬 鳥屋部孝氏・森子氏蔵 金子家文書

新選組と流山

新選組外伝

流山屯営で近藤と土方は 何を語り合ったのか

第2話

JR京都駅の近くで小さな印刷所を営んでいる石田孝喜さんは、家業の間をぬって古書店や古文書を探したり、墓や碑の調査などされている。卒業した早稲田実業の先輩に、東京は調布深大寺にお住まいの浅田平八氏がいた。朝田氏は調布生まれで、「近藤勇の会」を主宰。その浅田先輩から「せっかく京都に住んでいるのだから、近藤勇のことを何でもいいから調べてみてくれないか」と命言された。

昭和四十六年夏、京都府立総合資料館で仕事の合間をぬって史料探しをしている時に「新撰組往事実戦譚書」という題目が目にとび込んで来た。早速、全文の複写願を出し複写を入手した。その中の流山の一節。

板橋総督府からの兵に十重二十重に囲まれた近藤勇は捕吏(薩摩藩有馬藤太)に割腹の決心をして、身支度をやるからとしばらくの猶予を乞い、三、四名と一階に昇った。その時土方曰く「ここで腹を切るのは大死だ。運を天にまかせ、板橋総督へ出頭し、あくまで下総の治安を守るために流山に屯営しているのだと主張するのが得策である」と説得。近藤もやっと頷いて板橋に出頭することに同意した。新選組の局長、副長としてともに戦乱を潜りぬけて来た男の別れに当って、どこまでも生き抜いて欲しいと思うのが心情であろう。

その足で土方は、江戸の勝海舟のもとに走り、近藤の助命を嘆願する。海舟の日記には、一行「四日 土方歳三来る。流山転末を云」とあるだけ。この文書を書いた近藤芳助(のち川村三郎)は会津母成峠の激戦に参加。のち仙台で捕らえられた。戦後、横浜に移住し代言人(弁護士)となり県議員も務めた。発見された文書は京都の市議員高橋正意氏の求めに応じて書いた手紙で約七メートルの差紙に記された長文である。

(文/大出俊幸)



新選組が本陣を敷いたといわれている「長岡屋」の階段(流山市立博物館で展示中)

新選組入隊記

新選組外伝

近藤勇を捕まえに来た男

第3話

新選組が五兵衛新田(綾瀬)から流山に転進した慶応四年四月一日、同じ日、板橋の西軍総督府は香川敏三(水戸の人)に宇都宮行を命じた。香川隊はその日千住に泊り、翌二日、日光街道を北上して杉戸から粕壁(春日部)にかけて宿営した。そこへ流山の田中藩陣屋から「武芸集団が流山から来た」との情報が届く。関宿の向いにある境町の小松原家に残された文書に「亀吉使茂助口上書」があり、流山の加村というところの陣屋より杉戸の新政府軍へ第一報がもたらされたところである。

斥候を務めた薩摩藩の有馬藤太が後年語っているところによると、翌三日、午前四時に部隊が粕壁を出立すると同時に隊



羽口の渡し跡、市内八カ所に設置された「江戸川渡し跡(津柱遺構)」のひつ

を二分し、一隊は反転。斥候の有馬藤太は馬を走らせ羽口(はくち、とも言う)の渡しを渡って流山に向かう。五人の兵と足軽の坂本を連れて本営を防れ「大久保さんに会いに来た」と申し入れる。「いま仕度中ですからしばらくお待ちください。草鞋はきのまままで結構ですからどうぞお上がり下さい」といってお茶が出される。幕府の奴らはお茶に毒を入れて殺すと聞いたから「昨夜、酒をのみすぎたので水を一杯いただきたい」といって、照れ隠しに水をのみ。

しばらくして大久保が立派な紋付袴で出て来て、二人の小姓を呼び寄せ、一人には書籍と小刀、他の一人には書籍とピストルを与えた。主従の別れとはいえ同情のあまり涙が流れる。

有馬藤太はのち、宇都宮攻略戦に向かったが傷を負い戦線離脱、戊辰役後、官吏となったが、西南戦争に呼応して起ち投獄され、恵まれぬ後半生を送った。香川敏三は首脳陣にとり入り戊辰役論功行賞の副委員長など努め宮内庁に入る。青山麓地の中でも広い香川の墓所には大きな鳥居があり、女官一同と刻まれている。

(文)大出俊幸

新選組入隊記

新選組外伝

近藤勇について行った男

第4話

私事にわたるが、私は大学受験で落第し、農業を手伝いながら一年浪人をした。頼りは受験参考書とラジオ講座のみ。なかでも小野圭次郎の「英文解釈」にはお世話になった。

後年、その小野圭次郎の義父が、新選組の鈴木三樹三郎(兄は新選組の大幹部・伊東甲子太郎)と知って腰を抜かした。早速、子孫

探しに走り、石岡市在の鈴木家を訪ねたのが、昭和四十六年の晩秋だった(御子孫の鈴木康夫氏には流山市長流寺での第一回近藤勇忌に出席いただいた。語り)



近藤勇の墓(宮古市海岸通り)

樹三郎らの宿舍・月真院に泊り込んで「新選組再掘記」を書き上げた。本の上梓後、釣さんから新選組・島田魁の子孫が見つかつたから一緒に敦賀に行つて欲しいと言われ、雪の中、塩津敦子さん宅を訪ねた。遺品のなかに島田魁の日記があつた。

その一節「近藤某と付き添い野村利三郎、村上三郎、右有馬(藤太)と同道にて板橋本営に至る。村上三郎、途中より流山に帰る」とある。

旬日を待たず、鈴木さんの紹介とあって釣洋一氏が会社に訪ねて来た。聞けば生麦にある日産自動車工場の臨時工をしながら新選組の研究をしているとのこと。手には新選組の関連写真と三十枚ばかりの原稿。本にすることをすすめる。京都のバチンコ屋に職を求め、休み時間はすべて取材に専念すること三年。

最後の二カ月は鈴木三

されてやっと釈放された。のち春日左衛門の陸軍隊に入り東北戦線に戦い石巻で榎本武揚隊にいた土方歳三と合流。宮古湾海戦では、三メートル宙を飛び敵艦に乗り移つて激闘の末、海中に没したという。

今も宮古市の海岸通りに面して「近藤勇土の墓」と刻まれた小さな鳥居がひっそりとたたずんでいる。(文)大出俊幸

新選組と流山

新選組外伝

土方歳三の密使

第5話

釣洋一さんの発見した「島田魁日誌」によると「その夜（四月三日）、土方は附添二人を連れて江戸に走り、大久保一翁、勝安房に会った」とある。

土方歳三は近藤勇の助命嘆願のため勝海舟に逢いに行ったのだ。ここに言う大久保一翁は勝海舟とともに幕府の最後を支えた人物。

今年五月

月十一日
日野市高
幡不動に
おいて川
澄祐勝貫
主の英断
により、
新選組総
慰霊祭が
とり行わ
れた。一
翁の子孫
・忠昭氏
・歳三の子
孫・陽子
さんが代
表焼香を
された。



東京都新島村に建立されている相馬主計の歌碑

「相馬某、大久保、勝土方の封書を持って板橋へ行き近藤に渡した」と。相馬某こと相馬主計は板橋総督府に行き、近藤勇助命嘆願の密書を差し出す、そのまま捕まり脇本陣・豊田市右衛門方に留置された。すでに近藤勇の正体はわかっていった。相馬は近藤処刑の四

月二十五日によつと釈放され幕府陸軍歩兵大隊とともに東北戦線を戦う。磐城久の浜から白石を経て仙台に姿を現し、石巻で土方歳三に再会。

榎本艦隊に合流して猛吹雪のなか北海道森町鷲の木浜に上陸、箱館戦争を戦い抜く。以来、最後の新選組隊長として指揮をとり、箱

館山麓の弁天台場で孤立するが、五稜郭から救出に向かった土方歳三が一発の銃弾で馬上に斃れ榎本武揚は降伏する。戦後、相馬は旧幕府軍首謀者として終身流刑

が言い渡され、新島に流された。明治五年秋、赦免となり、新島で娶ったマツを連れて東京に帰る。ある日マツが使いから帰ると、割腹自殺した相馬主計が血の海に染まっていた。享年三十。カミュの「異邦人」を思わせる最後だった。

(文)大出俊幸

新選組と流山

新選組外伝

少年兵・田村銀之助の

数奇な運命

第6話

先年、流山市文化会館で「ラブ・レター」が上映された折に監督の森崎東さんが撮影にまつわるお話をされた。

森崎さんの兄上・森崎湊氏は昭和二十年八月十六日未明、三重の三重海軍航空隊の寮から脱走し、夜明けの浜辺で一人割腹自決した。二十一歳だった。

慶応四年の新選組流山駐屯地には十三歳の少年兵・田村銀之助がいた。大正になって田村銀之助が語ったところによると「流山で降参の際は夜中でしたから、多少の武器は畑へ隠したのですが、鉄炮を持って弾薬を持たぬ人がいたり、弾薬を持って鉄炮のない者がいる始末で、殆ど役に立たなかった」と香川敬三隊の突然の包囲による混乱ぶりを伝えている。

行きの命令が下り、他の少年兵と出発するが、足を痛め脱落。ひとり米沢街道をとぼとぼと仙台をめざす。田村にはあくまで土方歳三について、戦う道しか頭になかった。箱館戦争では幹部伊庭八郎、春日佐衛門のモルヒネ服毒死を傍らでみることになるが、榎本武揚総裁がまだ先の人生があるのだから降伏しろ、というすすめに答えて「十五の年で命が惜しい。五十でも惜しい。八十でも惜しいのです。私も武士の家に生まれたものであって、皆さんと一緒にこの城に立て籠った以上は死する覚悟である」と。

森崎湊は最後の武士として自刃し、田村銀之助は大正十三年、六十九歳まで決して平坦ではなかった人生を生きた。

(文)大出俊幸



田村銀之助とその家族（山崎雅子さん提供）

新選組と流山

新選組外伝

流山神社に關つた

菊の御旗

第7話

今年の「広報ながれやま」一月一日号に載つた恩田家文書は、全国の新選組ファンに衝撃を与えた。これにより、流山での新選組の動きがより鮮明になってきた。長岡屋に向かつて兵たちは浅間神社裏手に「御かんぐん(官軍)方大将、菊の紋付きたるはた(旗)お(押)し立て陣取り、江戸方へ(の)本陣長岡の方へ大砲をむけ置く」と新選組を包圍した。

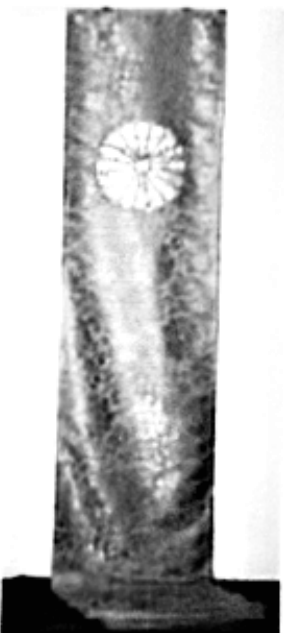
思えば半年前、慶応三年十月十三日早朝、岩倉具視は子の具定と八千丸を公家・中山忠能(明治天皇の祖父)邸に使いに出した。中山は元服前の八千丸の下着の背中に書類を縫いつけ帰るように言うが、八千丸が門を出たところに新選組が見張っていた。が、子どもだから、と見のがしてしまつた。その文書は「徳川慶喜を殲滅せよ」と書か

れた偽の詔勅だつた。この長州藩にあてた詔勅を届けるべく、大久保利通、広沢兵助らが太坂から出航する直前、大八車に緞子を積んで祇園一力のおゆう(大久保の愛人)が駆けて来た。

大久保は緞子を山口の請隊会議所の二階に運びこみ、長州の学者・岡吉春に錦の御旗を作らせた。

日月を表す錦旗と菊の御紋旗十枚は一ヶ月後の鳥羽伏見の戦いに天皇旗として翻つた。そして、中山邸に使いに行つた兄・具定はいまや新政府東山道軍の総督として板橋にあり、先鋒・香川敬三隊が、岩倉・大久保の策謀によつて作られた三メートル六十センチの菊の御紋旗を押し立てて浅間神社に陣を敷いたのだ。

(文)大出俊幸



▲ 慶喜 赤地黒縁牡丹文旗幟子(仙台市博物館提供)

新選組と流山

新選組外伝

もう一人の少年兵

市村鉄之助

第8話

生前の司馬遼太郎氏にある記者が「先生は御自分の作品のなかで何が一番好きですか」と聞いたことがある。司馬さんはしばらく考えて「ひとつというのはむづかしいので、二つにさせて下さい」といって、「空海の風景」と「燃えよ剣」をあげた。

その「燃えよ剣」を読んでいる、どうしても気になったことがある。土方歳三の小姓・市村鉄之助が歳三の命を受けて辞世の短冊と歳三の写真(市村鉄之助の文字が残っている)



市村鉄之助は大垣の人。慶応三年秋、十五歳で兄・辰之助にさそわれ新選組に入隊。鳥羽伏見、甲州勝沼と戦い、五兵衛新田(足立区綾瀬)に集結したある夜、兄・辰之助に脱走を話しかけられる。が鉄之助は踏みとどまつた。その後、脱走した兄の汚名に耐え、歳三に従つて箱館まで戦いつづけた。

「大出さん、ちょっと二階へ」といって本棚の裏に隠してあつたウィスキーをすすめながら「薩摩史話」と題された三冊

「頗る勇氣、性亦憤烈」といわれた少年兵・市村鉄之助にとつて、流山は人生の岐路であつた。

(文)大出俊幸

新選組と流山

新選組外伝

五兵衛新田から脱走した
大石隼次郎の断首

第9話

NHK大河ドラマ「新選組」も佳境に入り、今月五日には、流山での近藤勇・土方歳三の別離が放送されるという。いくつかの名場面のうち、堺雅人演ずる山南敬助の格子越しの恋人・明里との今生の別れと、局を脱するを許さず、という新選組の掟に触れて、前川邸の一室で沖田総司の介錯により切腹する場面は歴史の非情と人生の哀愁を伝えて視聴者の胸をうった。



新選組中本陣・金子邸跡
(鳥居部孝・金子氏墓、足立区立郷土博物館提供)

五兵衛新田(足立区綾瀬)で兄・市村辰之助に脱走を呼びかけられた少年兵・市村鉄之助は隊に踏みとどまり、土方歳三と行をとにもするが、勘定方の大石隼次郎、三井丑之助と市村辰之助は脱走した。今までに脱走した新選組隊士は次々と追捕され、切腹させられているにもかかわらず…。三井丑之助は東北・白河

の戦いで西軍に投降し、西郷隆盛の助力で薩摩藩に身をあずけていた。大石隼次郎は東京に潜伏していたが、生活に困り、共に脱走した三井の誘いもあって頼って行ったところ突然逮捕された。

刑部省に連行され、坂本龍馬殺害の嫌疑で執拗に尋問されるが龍馬暗殺の関与を断固否定、裁判

を切り抜けたかに見えた。が、京都新選組のころ分離した、高台寺党の首魁・伊東甲子太郎を奸策によって惨殺した一件の罪により、伝馬町の牢屋敷の刑場で斬首された。ともに五兵衛新田から脱走した仲のよかつた三井丑之助を信頼したばかりに、まさかの友の裏切りで命を落とす羽目に陥った大石隼次郎の生涯も哀惜あまりあるものがある。

(文/大出俊幸)

新選組と流山

新選組外伝

大久保大和は近藤勇であると
証言した男

第10話

京都東山・天皇家の御陵で知られる泉湧寺は錦織に彩られ、慶応三年、禁裏御陵衛士となった伊東甲子太郎、鈴木樹三郎兄弟(石岡市出身)ら一統が歩いたであろう参道は足音のみが空に吸われて行く。

伊東甲子太郎ら四名は京都油小路で凍てつく冬の夜、近藤、土方側の手によって惨殺されたが、その残党、加納繁雄、武川直枝(もと清原清)が薩摩軍の探索方として、板橋総督府に出陣していった。

流山から越谷を通って板橋本宮に送られて来た近藤勇は本陣・飯田新左衛門方に収容され裁判を受ける。あくまで大久保大和と称する人物の首実験役に、油小路の激闘を生きのびた加納、武川が指名された。それでも近藤は恐い。陣子の穴からぞと見ると、果たして近藤勇だ。会うにしても刀を持っていては危ないから、双刀をとりあげてもらい、謀殺役平田九十郎立ちあいのもと近藤の前に出た。

「大久保大和、改め近藤勇と声をかけますと、近藤は実にエライ人物でありましたが、その時の顔色は今に目につくようではありませんはだ恐怖の姿でありました」(加納繁雄談)。

のち、豊田市右衛門方に収容され、岡田家武術指南役の横倉喜三次の書き残した覚書によれば、近藤勇は足枷の上、入牢。流山からついて行った野村利三郎、近藤の助命嘆願の手紙をもって江戸から駆けつけた相馬主計はともに縄を打たれ、別々の牢に収容され、昼夜、厳重に取り締まられていた。

横倉喜三次は、近藤の右肩の傷を気づかてた。たひ近藤のもとを訪れ士道義を重ねた。近藤はいろいろお世話になったが、何もお返しすることが出来ない。せめて腰刀を」と感謝のしるしに愛刀を贈った。いづれ、首斬り役となる横倉に、この刀で首を刎ねてもらいたいという暗黙のサインを送ったのだ。

(文/大出俊幸)



近藤勇と新選組隊士供養塔(寿徳寺管理・北区教育委員会提供)

新選組入隊記

新選組外伝

近藤勇・橋本左内斬首

第11話

上野・東京国立博物館の正門を左に三十メートル歩くと、重厚な武家屋敷門が見えてくる。もとは千代田城下・丸の内にあった因州藩邸。慶応四年四月二十四日、岩倉具視の三子・東山道義、総督岩倉員定は夕方、板橋から因州藩邸に入った。岡田家の武術指南役・横倉喜三次も従った。翌二十五日正午ころ、板橋より早駕籠があり「御預かりの大久保大和は死罪、ついでには横倉喜三次に太刀取りをするように」との使いがあった。横倉は急いで板橋に帰った。



旧因州藩邸（鳥取）池田屋敷表門

刑場となつたのは馬捨て場といわれる広場。中央に近藤勇は黒羽重に黒の紋付、羽織を着て座り、下役人が腰綱を持っていた。近藤の前には穴が掘られ、周囲を監察方をはじめ兵士、中役人が厳重に取り囲んだ。近隣の屋根の上、土手の上は見物人でいっぱいだった。横倉喜三次は近藤に最後の挨拶をし「私が太刀取りを命じら

れました。何か申しおかれることがありましたら承ります」というと、近藤はことのほか喜んで、「君の太刀取りならば何も申しおくことはありません。よろしくたのみます」と言った。

斬首の場面を隠から見ていた勇の甥・宮川勇五郎は「丈の高い方の人は「やつ」というと一太刀で斬りましたが、臆に見事な腕前でした」と語り残している。首が斬られる瞬間、勇の体が立ち上がるようにして前に倒れ、首穴にかかる橋のようになり、穴に落ちた首には血がからなかつた。

参謀北嶋仙太郎は首実検のあと、近藤の首級を白木綿で巻き、アルコール漬けにして箱に入れ因州藩邸に送った。岩倉員定による検分があつた。勇の首は京都に送られ、三条河原で三日間、鼻首にさらされた。勇の首が描かれた号外の瓦版が五月の京の空に舞っていた。

(文)大出俊幸

新選組入隊記

新選組外伝

昨夜、橋本左内斬首

近藤勇の首を隠す

最終話

昨夏、流山市文化会館で新選組の子孫と語る会が開かれ、御子孫の宮川豊治さんが近藤勇にまつわるお話をされた。あと柳家で二次会に新選組流山本陣跡にお住まいの秋元浩司さんが、アルバムを持参され、「昭和初年、近藤勇の御子孫という方が訪ねてこられ「勇が大変お世話になりました」と言つて記念に一枚の写真をおいて行かれた」と。その写真を見た宮川豊治さんが「この子供は私で、髪のおじいさんは勇五郎さんだ」と思わず叫んだ。

勇の甥・勇五郎（のち勇の一子・瓊子と結婚）は板橋で近藤勇の斬首を見届けた後、上石原の実家に帰つたが、遺体をそのままにしておくわけにはいかないと伝を頼つて三日後の夜八時頃、屍を掘りに向かった。広い原つばの向うに番小屋があり、番人に三巴渡して勇を埋めた処に案内してもらつた。首のない胴体が勇であるとの証拠はただひとつ。肩に残る鉄砲の傷痕（京都の伏見墨染で伊東甲子太郎の残党に狙撃された傷。松本良順の手術で治つたが親指が入るくらいの痕が残つていた）。



勇の子孫が持参した宮川家一族の写真

ら五分）に隠れていた。勇五郎は板橋の刑場から三鷹の菩提寺龍源寺に運ぶ途次、成願寺に寄つて妻子に永の別れをさせたという。同じ頃、千駄ヶ谷の植木屋平五郎の離れで肺結核を病み療養をしていた沖田総司は四キロ離れている成願寺をしば訪ねて、おつね母子と語らつていた。「沖田がやつて来て、血を吐きましてね」という、おつねの言葉が宮川家に伝えられている。新選組の仲間と別れ、池尻橋近くの水車のまわる田舎家（千駄ヶ谷・野口英世記念館あたり）で孤独の淵をさまよつていた沖田は、あの夜、近藤の遺体に会えたのだろうか。勇の斬首から二カ月後、沖田は病死。瓊子は一子久太郎を残して明治十九年二十五歳で逝去。一人残された勇の妻つねは明治二十五年世を去つた。享年五十六。

(文)大出俊幸